

復刻版地図帳の魅力—テーマ図に見るその時代— II. 昭和25年版

東京学芸大学名誉教授 青木栄一

昭和25年という年は、昭和20年に第二次世界大戦が日本の敗戦で終りを告げてから5年後であるが、地図帳編集に要する時間や利用できる統計年次からみると、昭和22～23年ごろの実態や考え方が現れていると考えてよいであろう。学校教育の制度や地理教育の枠組み自体が大きく変えられた時代であっただけに、この地図帳も現在から見るとなかなか面白い内容をたくさん含んでいる。

1 社会科の一環としての地理的分野

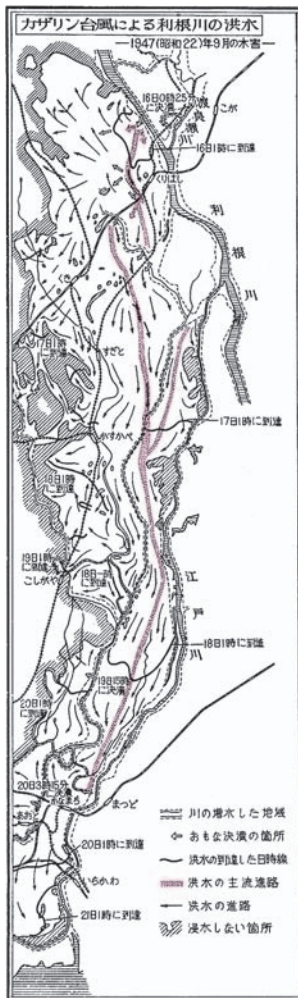
戦前の学校教育では、地理や歴史はそれぞれ独立した教科であったが、戦後の学制改革で「社会科」の一部門に位置づけられた。その前には一時的ではあったが、地理と歴史の教育が禁止された時期もあって、新たに義務教育に組み込まれた新制中学校における地理の内容にもかなりの混乱があった。先生も生徒も大きな戸惑いがあったことは否定できない。

巻頭に生徒と先生向けにこの地図帳の特色と使い方についての説明があり、また「学習指導要領」の単元別の図表内容が示されている。1年から3年まで連続する学習であるが、3年の単元は従来の地理ではあまり扱わなかった文化、政治的な内容が多く含まれているのがわかる。

同時に基本的に変ったのは、地誌中心の学習、それも日本地誌と世界地誌が画然と分れていた戦前の状態が、系統地理的に再編成され、世界全体のなかで日本を考えさせる方式が重視されたことであろう。このため地図帳も日本と世界が統合された方式となり、多くの主題図も系統地理的な分類に従って配列されている。

たとえば「われわれをとりまく自然」では従来の地形、気候（降水量と気温など）といった基礎的なものにくわえて、天気図（p.5「ある日の気象通報」、p.12「台風の進路」「台風の気象」、災害の実態（p.13「カザリン台風による利根川の洪水」（図①）、国立公園（p.20「日本の国立公園」「アメリカ合衆国の国立公園・利用者数」）の

図①



ような主題図が収録されている。

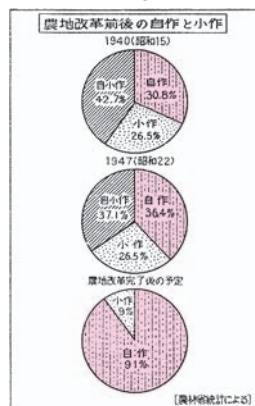
p.29～37「農業と農村生活」では「農地改革前後の自作と小作」（図②）「高冷地の開拓」などに当時の日本農業の現代的な話題が取り上げられた。

p.48～52「家と家庭生活」では、「住むためのいろいろなくふう」と題して、家の内部の間取りや家具の配置や新しい台所ではいかにして生活の能率を上げるか、といった後年の「家庭科」的な内容が含まれる。

p.78～82「文化と教育」では「ノーベル賞受賞者の属する国」や「史蹟名勝天然記念物の分布」「国宝の分布」「日本の図書館数と入館者数」「世界のおもな国々の教育制度」など従来の地理からみるとかなり広い範

囲で社会現象を取り上げているし、p.86～88「災害」では東京都区内の「交通事故の多い所」「日本の結核死亡率」（図③）「日本の無医村」「寄生虫保有者数」「浮浪児数」にはその時代の特徴や関心事が現れている。

図②

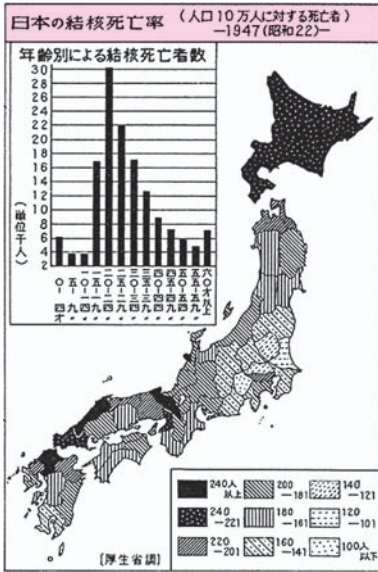


2 日本の将来像がみえない時代

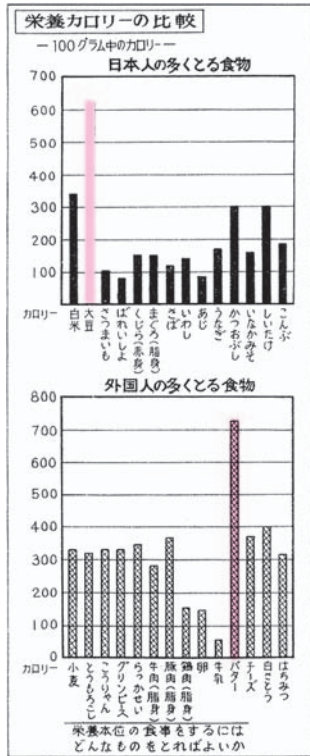
敗戦直後の日本人は、どん底の貧しさの中で、この国が将来どのような国となるのか、将来像を描くことがたいへんむずかしかった。そのなかでアメリカのような豊かな生活や社会構造に素朴な憧れをもつ人が多かった。社会主義的革命がすぐにも実現するかのように信ずる人もたくさんいた。さすがに後者の立場を示唆するような主題図は収録されていないが、前者の考えはあちらこちらに顔を出しており、また日本の貧しさが強調されている。

「食料の生産」のなかのp.28「栄養カロリーの比較」(図④)という図は、日本人と外国人(欧米人の意味であろう)の多くとる食物の100グラムあたりのカロリーを比較して、「栄養本位の食事をするにはどんなものをとればよいか」と設問して、暗に欧米風の食事が優れているかのように誘導したり、同じページの「世界のおもな国の牛乳飲用量」では日本人も欧米並みにもっと牛乳を飲まねばならないと示唆しているかのである。あるいは「農業と農村生活」では、p.32「明るい農村計画(理想的な土地の利用)」(図⑤)と題して、ポプラの防風林に囲まれた水田プラス畜産重視で、ヨーロッパの混合農業の農家の畑作を水田に変えたような奇妙な農家の見取

図③



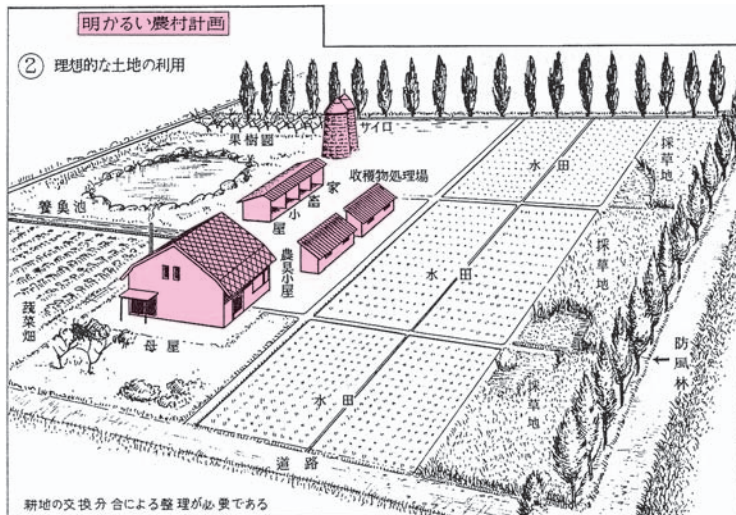
図④



ないが、将来の日本は軽工業中心になると考えたのであろうか。「衣服の原料とその生産」のなかのp.45「繊維消費量(国民1人あたり)」のグラフでも「生産の計画がよくいっても戦前の状態に戻るのはなお遠い」と説明されている。

昭和25年には朝鮮戦争がはじまる。そしてこの年が日本にとって新たな経済発展の入口の年となったのである。

図⑤



り図がある。「近代工業の発達」ではp.69「日本の工業生産の変化」として1930年、1941年、1947年の産業構成比を比較した図がある。それぞれ「平和産業として紡績や食料品の生産が多い」「戦争準備が強化されたので重工業がもっとも多い」「再び紡績や復興関係の工業が盛んになっている」という説明は、産業構成比をすなわにみればあまり適切な説明とは思われないが、